

## 高展開の「半構成方式」研修型エンカウンター・グループのファシリテーションに関する考察：展開の促進要因と留意点に着目して

松本, 文  
九州大学大学院人間環境学府

<https://doi.org/10.15017/18429>

---

出版情報：九州大学心理学研究. 10, pp.167-175, 2009-03-31. Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University

バージョン：

権利関係：

# 高展開の「半構成方式」研修型エンカウンター・グループ のファシリテーションに関する考察

—— 展開の促進要因と留意点に着目して ——

松本 文 九州大学大学院人間環境学府

A discussion toward the facilitation of the training type encounter group with “Middle-Structured style”  
in the high stage of “Group Development”  
Focused on promotion factors and cautions of group development

Aya Matsumoto (*Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University*)

One case with the training type encounter group of the Middle-Structured style is reported in this paper. The training type encounter group of the Middle-Structured style developed high though this type of group was said not be easy to deepen. Moreover, the process of such a group is peculiar, and consideration of facilitation is needed. Therefore, one case with training type encounter group that uses the Semi-Structured style was reported in this paper and, (1) the characteristics of this group, (2) the promotion factors of group development and, (3) the cautions in group development, and were discussed. The promotion factors of group development included not focusing on difference the between facilitators and member, and paying mutual respect to such difference, and doing complementary intervention. The caution included the precaution to the euphoria and keeping an eye outside the session.

**Key Words:** Middle-Structured style, high development encounter group, promotion factors of group development, cautions of group development

## I はじめに

近年、教育や医療などの臨床現場で様々なグループ・アプローチが実施されている。中でもエンカウンター・グループ（以下EG）は、「自己理解、他者理解、自己と他者との深くて親密な関係の体験」（野島、2000）を目的としたグループ・アプローチである。

EGには参加者が自分の意思で参加し、未知集団で行われる「自発参加型EG」と、研修を目的として参加を義務づけられ、既知集団で行なわれる「研修型EG」がある。看護学校生を対象としたEGは、授業の一環として実施されるため、研修型EGに分類される。既知集団型EGは義務付けられた参加であるために動機付けが低いと言われている（平山ら、1994）。また、篠原ら（2007）は、看護学生への研修型EGの特徴として、メンバー（以下Me）が学校側によって参加させられており、動機付けが低いこと、Meが全員既知のクラスメートであり、日常生活への影響があることが予想されること、MeのほとんどがEG初参加であり、何をやるのかわからず不安が高いこと、Me全員が青年期であり、特有の難しさを抱えていること、等質性集団であるため、相互交流がおきにくいこと、等を挙げている。

構造化という点では、EGは、構造化されていない「非構成型EG」とエクササイズを中心に構造化された「構成型EG」の二つの意味で使用されている（野島、2000）。野島（1994）は、近年の看護学生は依存性が強く、構造のあいまいさへの耐性が低く、非構成型EGとの相性が悪くなってきており、かなり慎重に工夫していく必要があると指摘している。一方で、森園ら（2006）は、構成型EGでは非構成型に比べて自発性を発揮しにくく、Meが依存的になりやすいことを示唆し、「半構成方式」を考案した。「半構成方式」の特徴は、10人前後の同じMeによって全セッション（以下Se）を行う、各Seのテーマを決め、そのテーマに沿ってグループ（以下Gr）は展開される、テーマやGrの進め方は、Grの展開によって柔軟に変更される、1つのSeで全員に発言する機会を与える、とされる。「半構成方式」の有用性として、森園ら（2006）は、MeのGrへの抵抗の少なさ、安全感、深い自己理解と他者理解、深くて親密な関係の体験、などを挙げており、一方で限界としては、「全員が発言できる」一方で「しなくてはいけない状況」となる、「自発性」や「Grの発展」という点について非構成ほどの深まりは難しい、等を挙げている。なお、近年は半構成方式によるEGにお

いて、ファシリテーター（以下、Fac）とファシリテーター・キャンディデートとが組んで Fac 養成を試みる「コ・ファシリテーター方式」による実践が重ねられている。

以上のような点より、研修型 EG や半構成方式の EG は、そのプロセスが独特であると言えるため、ファシリテーションについての工夫の必要性が求められており、これまでもそのプロセスやファシリテーションについての報告がなされている。ただその報告の多くが、コ・ファシリテーター（以下、Co）の視点を中心とし（森園ら、2006；原田、2007；桂木、2007；二ノ宮、2007；篠原ら、2007；Catharina H.Y., 2008；星野ら、2008）、Fac の視点で報告されたものは桂木（2008）だけであり、「半構成方式」におけるファシリテーションの研究は十分であるとは言えない。

よって本稿では、筆者が Fac を担当した高展開の「半構成方式」研修型 EG の事例について報告し、本 Gr の特徴、Gr の展開の促進要因、Gr の展開における留意点、に着目し考察を行なう。

## II グループの構成

### 1. グループの位置づけ

某看護学校 2 年生を対象として、年度末に学外研修施設において集中合宿形式（2泊3日、7Se）で実施された研修型 EG である。実施要綱に記された Gr の目的は、「人格と人格のふれあいの体験を通して、自己に目覚め、豊かな人間関係の基盤をつくる」であった。また、目標は、「1. ありのままの自分を認め、表現できる。2. 他者に共感的理解を示すことができる」であった。

### 2. グループ編成

1 クラス 40 名を無作為に 4 Gr に分け、それぞれに Fac と Co が 1 名ずつつき、4 Gr が同時進行した。報告する Gr の Me は、以下年齢の低い順に A~K と表記。平均年齢は 19.9 歳、全員女性で EG 経験なし。これに Fac（20 代女性、大学院生博士課程、Fac 経験数回）、Co（20 代男性、大学院修士課程、Me 経験はあるが Fac 経験は初めて）の計 13 名で構成された。

### 3. リサーチ

Gr 開始前後に参加意欲度や期待度、満足度などを記入する「参加者カード」、各 Se 後に感想や魅力度を記入する「セッションアンケート」、3 ヶ月後に感想や有意義度を記入する「フォローアップアンケート」の提出が求められた。参加意欲、期待度、満足度、魅力度、有意義度はいずれも「1: まったく感じない」~「4: どちらでもない」~「7: 非常に強く感じる」の 7 段階評定

である。得点の推移を図 1 に示す。なお、本稿では、アンケートの記述、得点とともに、Se 経過の Fac の記録と、スーパービジョン（以下、SV）でのコメントを明記し、考察を行なう。

## III グループの経過

### 1. 参加前の気持ち

Me のグループ開始前の参加意欲、期待度の平均値は、それぞれ 4.27 (SD = 1.00)、4.18 (SD = 0.75) であった。自由記述は、「内容が説明されていないのでよくわからない (I)」等、何を行なうのか分からない不安 (A, B, C, F, G, H, I, K) が多く記述された。

### 2. グループ・プロセス

テーマは、参加 Me にとって身近で、発達段階的にも大切なテーマであろう内容を吟味し、各 Se のテーマとして予め「私の進路をめぐる過去・現在・未来」、「異性、友人、仲間」、「家族」などを用意しておき、Gr の展開に沿って柔軟に変更していくこととした。Se のテーマは前 Se 終了時に予告した。また、それぞれのテーマについて各 Me が必ず発言できるように Fac がタイムキーパーを務めた。Fac と Co は毎 Se 後、ベテランファシリテーターから SV を受けた。以下、Gr 中の Me の発言は「」、Fac の発言は < >、Co の発言は で表す。

オリエンテーション（1日目 9:30~10:00）

Fac 紹介、Gr 分け発表、Fac と Gr の組み合わせ、部屋をみだくじで決める。参加者カード記入、写真撮影。写真に名前の記入を求めると、Fac に「あだ名でもいいですか」と質問をして記入。Fac にもあだ名をつけて記入した。

Se1: 「自己紹介・EG 参加の期待と不安」（1日目 13:30~16:00）

部屋に入ると扉近くの席が 2 つ並んで空いている。Fac が奥に進み Me の間に入れてもらい Co と対面する位置に座る。Fac から、EG について説明し、Se 開始。Me 同士のフィードバック（以下 FB）はあまりなく、まだ様子を見つつ進行している印象。全員が EG への期待と不安の両方を述べる。Me の何人かから「先輩たちに嫌なところをお互いと言う Se があると聞いて不安」、「先輩たちは泣くこともあった」等と不安が語られる。Co は「そういうことは絶対にしないよ」と Me の不安を和らげるような発言をし、一方で Fac は「嫌な思いはして欲しくないが、そういう事を避けながらではなく、あってもいいと思う」と異なる FB を行った。途中 10 分間ほど休憩を入れ、後半では「今（前半）過ぎてみて不安が少なくなった」と語る Me もいた。Se の終了間際に自由に感想が出てきて、(Me について) 知らな

いことを知れたことがよかったというコメントが多かった。オリエンテーションのときに撮った写真を見せて欲しいとの要求があり、Fac と Co に「馴染んでますよ」という声かけが多くあった。

Me の感想：魅力度平均 = 5.18 (SD = 0.47)。自由記述では、意外と楽しかった、話しやすかった、今後は楽しみになったという記述が多く見られた (A, B, C, D, E, F)。緊張した (G, I, K) という Me もいた。Fac に関しては「面白い先生」、「優しい」、「話しやすそう」等、各自がそれぞれの印象を述べていた。

ファシリテーターの感想：Fac 「クラス自体の雰囲気もいいのだろうと思う。Se1 から楽しい空気。素直な Me だなあ (5)」 / Co 「とても柔らかい打ち解けた雰囲気。表情が柔らかい。不安が多く語られたけど、取ることはできたかな (6)」

【SV】親しみを込めてのニックネームだと捉えられる。20 代前半のカルチャーとも言える。同年齢で構成されている Gr であり、同質性と異質性のバランスが鍵になる。ファシリテーターがある意味、異質性とも言えよう。

Se2：「私の進路をめぐる過去・現在・未来」(1 日目 18:30 ~ 21:00)

入室すると「なんでもバスケットで席替えしてたんです」と全員で盛り上がっている。<じゃあ次ラスト>と一回許容。<始めようか>と言うとスムーズに開始する。看護師を志すきっかけとなった経験や看護師に対する思い、何科を志望するかといった内容が話される。向いていない科の話をする Me に対しては、「そんなことない」、希望する科の話をする Me には「合う、合う」といった、positive な FB が多い。FB を受けた Me は「照れる」と言ったりはにかんだ笑顔を見せたりする。K が涙を交えながら自己の体験を語ったり、C が A にかけた暖かな言葉に Me 全員が涙ぐんだりする。真剣に進路と向き合う Me を前に、Fac は対人援助職という点で共通する思いを持つように感じる。Fac はその思いを Me に伝えると同時に、大学院所属に至るまでの過程や現在の悩みや葛藤を語る。Me は Fac や Co の進路に関しても興味を持ち、質問もする。フリートークでは「B の話を聞いて一人とじっくり向き合うという看護の姿勢を改めて思い返した (C)」、「Fac の話を聞いて、他の分野でも頑張っている人がいるって思った (A)」等、他者の話を聞き感じたことが語られる。

Me の感想：魅力度平均 = 5.90 (SD = 0.63)。自由記述では、視野が広がり自分が考えている将来を大事にしながらももっと詳しくどうしたいか深めていきたい、あきらめない限り、自分を信じ続ける限り抱いているものが実現できる気がしたという前向きな感想が書かれていた (D, F, G, H)。Fac については、「頑張っていてすごい」、

「尊敬する」という感想が多く (B, D, H, K)、「自分に欠けているところだと思った (H)」、「自分ももっと頑張らなきゃ (D, K)」という記述があった。

ファシリテーターの感想：Fac 「持ち時間 Over 反省。この Gr への思いが今もくもくと形づくられているみたい。(Co について) 女の子ばかりの Gr ですが、いいかんじに馴染んでいますね (6)」 / Co 「真剣モードと、遊びモード(フルーツバスケット)のメリハリがついてとてもいい雰囲気。ファシリテーター 2 人がたまたま言葉出ないとき、Me から自然に FB 出てよかった (6.5)」

【SV】突然時間で区切るのではなく、フルーツバスケットに少し付き合ったことはよかった。

Se3：「異性・友人・仲間」(2 日目 9:00 ~ 11:30)

笑顔が多く見られ、Me 間の FB も活発。Me が、男性である Co の恋愛の話を楽しみにしている様子もうかがえた。J がひとしきり話した後、「ここからは聞き逃して欲しいのだけど…」と前置きをした後、普段の友人関係に置いて感じていることを以下のように開示した。「(自分の) 心の中のもやもやがあって伝えたい時、(友人に) 話していいかどうか分からない。皆そうだと思うし、(友人に) 甘えることできないなって思う。D が「(もやもやしていることを) 言ってくると嬉しいし、言ってくれないと寂しい」と FB をする。Fac も、<甘えられないと考えることは J の強さでもあるかもしれないが、今ここでは、甘えられないということを Me に言って少し甘えることができたよう>と感想を伝える。フリートークでは「高校の時とか皆色々あったのが知れてよかった (A)」、「皆の考えが聞けてよかった。より大事な友達と感じる (I)」という発言がある。Se アンケート記入中、B が突然泣き出す。Me は皆心配そうな表情を浮かべるが、どう声をかけてよいか困惑もしているようで、誰も B に声をかけることはない。B が泣きやむ気配もなく、Fac は B が何か訴えたいようにも感じた。Fac は席が隣であった B に声をかけ、一緒に部屋の外へ出る。Co は心配そうな表情の Me に 皆心配だと思うけど、この Gr で起きたことはできるだけ皆で考えていきたいと思っている。B が話せるタイミングで話せることを話してもらえるのを待ってもいいかな と声をかけ部屋で Me と過ごす。Fac は部屋の外で B の涙が収まるのを待つ。B は「すみません」を繰り返す。B が何かを語り出す様子もなく、Fac は Se を終わってもよいか、Me が退室するがここにいってもよいか等を B に確認する。B は入室を選び、Fac とともに入室後、Me に Se 終了を伝える。Me 退室後、B が Fac にポツポツと語り始める。「J の話で頭が真っ白になった。自分は 1 番の友達だと思っていて何でも話していたが J は違った。悔しい。だけどそれが分かって良かったとも思う。申し訳ない。皆 (自分が泣いたことを) 気にしてると思う。皆に話さな

いと思うがどうしたらいいのかわからない」。Fac は J の話を聞いた Fac の感想を話したり、Fac として無力感を感じることも正直あるが、それでも皆の安全の為に居るつもりであること、手伝いができることもあると思うのでいつでも声を掛けてほしいということ伝える。部屋の外では J が待っていて、B と一緒に昼食に行く。

Me の感想：魅力度平均 = 5.54 (SD = 0.82)。自由記述では、「皆との絆を再確認できた (E)」というように、改めて Me 間の関係を目に向け感謝をする様子が見られた (C, D)。また、うまく言葉にできたか、うまく伝わったかという不安も記述された (G, I)。B は「皆の前で泣いてしまったから皆変に思っていないかな。すみませんでした」、J は「皆と線をおいてた気がするけどそれを越えることができてよかった。初めてっていうくらい自分の内にあるものが出せてよかった」と記述していた。ファシリテーターの感想：Fac 「皆お互いの大切さを素直に表現していてあたたかい。Se 後の B の涙 (が気になる)。今後の Gr の中でどう扱うか。B の気持ちは？」(6)」/ Co 「Gr は昨日よりテンションが低い。Me 間のいい FB が多かった。B のことについて、皆をどう納めるか (6)」

【SV】B が涙を流したことについて、次の Se の冒頭で扱う機会を設ける。発言がなければ Se は夜も明日もあるし、と切り替えて野外 Se に入る。発言が出れば話をしてよいが、Se4 の時間を全て使うとフラストレーションが溜まるため、野外活動の時間は確保する。

Se4：「野外 Se」(2 日目 13:30 ~ 16:00)

まず部屋に集合。Fac が「この Gr で起きたことはこの Gr の中で皆で考えたいと思っている。今言っておきたいこととかある人がいたら野外 Se の前に少しだけ時間をとりたい。私は気になっているし、皆も気になっているのでは」と問いかけると、D が「B の事...大丈夫？」と口火を切る。B は大丈夫と言い、色々な感情によって涙が出たことを B の言葉で説明。「皆に謝りたい。ただ、誰かの言葉が嫌だったとかではないので、そこは伝えておきたい」と語る。Fac から、Me に対しても何かあったら声をかけてほしいと思っているという事を再び伝え、野外 Se の話し合いに移る。Me 全員一致で、目的地を選択。疲れ気味の Me も見られる。広場へ移動すると皆走り出し、テンションは高まる。写真撮影、雪合戦、雪だるま作りを思い切り行なう。最後に Me 全員で何かしてはどうか提案、けいどろを行なう。

Me の感想：魅力度平均 = 5.81 (SD = 0.60)。自由記述では、「心の底から笑えた (B)」、「明日はたぶん筋肉痛 (C)」等が書かれ、楽しかったという感想が多い。ファシリテーターに関しては、「2 人とも若いしますます親近感が持てた (D)」、「一緒になって走り回って仲良くなれた (F)」というように、より近い距離で捉えたよ

うであった。

ファシリテーターの感想：Fac 「外の空気を吸ってリフレッシュ。Se の始めに取った時間、よかったかな。よかった (6)」/ Co 「最初みなサポートティブでいい感じで外に出れた。(Fac について) 自分にけいどろのとき振ってくれたのがありがたい。信頼してもらえている感じ (7)」

【SV】B は自分の言葉で語れることを語った。

Se5：「家族」(2 日目 18:30 ~ 21:00)

Me それぞれが家族への様々な思いを涙を交えながら話す。Fac はリスpons をしたい思いはあるがあまり言葉にできない。途中休憩を入れる前に、<皆の大事なものをを見せてもらっているよう。感じるものはたくさんあり、言葉にしたいという気持ちは強くあるが、なかなか言葉にできずにして申し訳ない気持ちもある>と伝えると、Me は皆じつと耳を傾け、目が合うと微笑む。休憩後に C から始まったが、持ち時間をオーバーして家族との葛藤、苦しさを涙ながらに語る。Me から多くの FB がある。後半はずっと涙を流しながらの Se となる。Fac が最後に残ったところで Se 終了時刻となる。Se 時間をオーバーすることに大きな葛藤や不安を覚えるが、時間をきちんと守りたいという気持ちがあることも Me に伝えながら<でも、聞かせてもらってばかりで 1 人だけ話していないのは少しずい感じもする。話したいし、もう少し聞きたい思いもあって、私は時間を延長したい>と伝え、Me 皆が頷く。Fac が家族についての思いを語った後、フリートークでは Me お互いがそれぞれを思いやるような暖かい言葉が飛び交った。20 分オーバーした後に Se アンケート記入に入る。A や C が退室時に Fac のところへ来て「時間、たくさん話してごめんなさい」と謝りに来る。

Me の感想：魅力度平均 = 6.63 (SD = 0.50)。自由記述は、「この Se を通して皆が優しく心あたりのいい人だという意味がわかった (G)」、「家族の形はそれぞれだけどその思いやりや愛を伝えてくれたことが嬉しかった (I)」、「今まで知らなかった皆を知り、だからこんなに優しく強い人間なんだと感じた (J)」等であった。ファシリテーターについては、話を真剣にまっすぐにきいてくれたこと、じっくりきいてくれたことが嬉しかったという記述や (D, E, I)、時間がオーバーしてもどんなことでも 100%で返してくれて嬉しかった (J) という記述がなされた。

ファシリテーターの感想：Fac 「深い。動き、流れ、空気、皆の大きさ。気になるのは時間。話しすぎた Me はいないか。Gr の力、人間の力を感じた。だけど複雑な思いで 6.5、気分的には 7 (6.5)」/ Co 「泣く人のためにティッシュが飛び交うのが、優しさが飛び交うようだ。(自分について) 重い話の後の FB は一番気を張って

いた。まとまらないけど何か思うところがあるということが伝えられてよかった (7)』

【SV】時間の枠は、それを守るために存在するのではない。時間を守れなかったことについて、Fac の中にすっきりとしない思いがあること、葛藤があるということは、今までは時間を守っていたという自分の美意識が傷付けられたのであろう。今の傷つきが成長の痛みかもしれない。まず何よりも Gr のことを 1 番に考えて行動すること。

Se6:「私のキーワード」(3日目 9:00~11:30)

自分についてのキーワードを 3 つ挙げる。考える時間をとり感想シートの裏に書いてから開始。Fac にじゃんけんて勝った人から始めることに。各自が好きなものや性格を自分のキーワードとして挙げ、フリートークでは相互に活発に感想や質問を言い合う。Se6 は大きな笑いが何度も起こり、皆のキーワードがびったりだと盛り上がる。アンケート記入の際、D が「誰が読んでますか」と質問。<私と Co で共有している>と答えると、「先生は読んでる？」と再び質問がある。先生は読んでいないことを伝える。

Me の感想：魅力度平均=6 (SD=0.81)。自由記述は、笑顔ばかりだった、笑いが絶えなかった (A, B, D) というように、Se5 の涙のことも思い返しているような記述が見られた。皆のことがさらに知れた、さらに好きになったと書く Me が多く、他者理解が深まったようであった。

ファシリテーターの感想：Fac「各自がしっかりと自分に向き合ってる姿すごいなあ。お互いへの思いやりがあたたかい。(Co について) Me のこころ動くような FB をされていたように感じた (6)」/Co「Me 間の FB が多い。発言量が少ない時、いかに意識させずに埋めるかが大事か (6)」

【SV】D の質問は、Se アンケートへ本音を書いているからこそ気になったのではないか。事実を伝える対応でよい。

Se7:「心の花束」(3日目 13:00~15:30)

好きな千代紙に、Me 全員に対して言葉の花束を書き送るということを Fac より説明する。30 分で書くことに。書いたら、すべて読み上げること、自分の名前を書くかどうかは各自で決めることを伝える。それぞれ、好きな千代紙を選び、机や床など思い思いの場所で自分のペースで書く。半分以上が書き終わっておらず、各時間を延長する。H だけが書き終わらず「どうしよう」と焦っている。Fac が慌てなくていいことを伝える。1 人ずつ読んで、感想を言うことに。涙ぐみながら照れくさそうに読み、全員皆への感謝の気持ちを口にする。EG の感想は、とてもよかった、楽しかったというものが多い。Fac へ「まだどこかで出会うという奇跡があってほしい」

というメッセージがあり、Co は 皆からいいものをたくさんもらった。僕が経験した Gr で一番よかった。人生はまあどうなるかわからない。奇跡がおきてどこかでまた出会えたら と述べる。Fac から <今回皆の真摯な姿に何度も感動して、皆にたくさん活力をもらえた感じ> を伝える。

Me の感想：魅力度平均=6.90 (SD=0.31)。自由記述は、「ありのままの自分を受け止めてくれる人ばかりでとても嬉しかった (E)」というように、嬉しい気持ちや感謝を記述する Me が多かった。「皆ステキだ。自分がこんなにくさいことをいっている。さらにさらっと。それにビックリもしてる (C)」、「これから成長する糧になったと思う (G)」という感想も書かれた。

ファシリテーターの感想：Fac「皆がよかったという言葉によかったという思い。Me 皆にとつてのこの Gr 体験の意味などが頭をめぐる。人間をより好きになった (7)」/Co「Me の最後の振り返りがよかった。(自分について)終わるの惜しいと Me が言っていないのに言ってしまった (7)」

### 3. 参加後の気持ち

Me の満足度平均は 6.75 (SD=0.46) であった。EG に参加できて本当によかったという記述が多い (A, B, C, D, E, F)。「皆人を思いやる心をもったいい人たちがばかりで自分もそんな人間になりたい (H)」、「もっと人と関わって私自身の内面を磨いていきたい (I)」というように、今後についての思いも書かれていた。ファシリテーターについては、感謝の言葉が記述され、出会ったことに感謝、またいつかどこかで出会いたいと書かれていた。

Fac の感想は「Me の真剣なひたむきな一生懸命な姿に多くの刺激をえた。(Fac として) Gr のこと、Me のことを第一に考える姿勢を持ち続ける決意。本当にできたかどうかと今後できるかどうか。同時に自分を大切にするという事。(Co について) 人と人は分かり合えるような気がします。なぜかわからないけどそんなことを思った。またゆっくりとシェアリング出来たらいいな。(6.5)」/Co の感想は「「生きることにひたむき、誠実、真摯な姿勢」「家族、友人に対する愛情」に触れることができ、今までで 1 番よかった Gr。みなキラキラしている。野外 Se はとても異質でももしろかった。Se5 の延長をめぐってはとても勉強になった。言葉自身が持つ重みについて考えた。(7)」であった。

### 4. フォローアップ

Me の有意味度の平均は 5.63 (SD=1.12) であった。自由記述では「今でも EG のことを思い出したりしている。皆で Fac と Co のことを話したりもしている (C)」

というように、EG 体験を思い返していたり、「またぜひ参加したい (D)」といった感想が書かれ、色々な人の意外な一面、考え方、人の良い所を知ることができてよかったと感じているようであった。日常生活への影響について、新たに絆が生まれさらに仲良くなった (A, B, C, J) と書かれ、自分の考え方や人の見方に変化があるという Me もいた (E, G, H, I, J)。

ファシリテーターとメンバーのグループ前の意欲度と期待度、セッションへの魅力度、グループ後の満足度、フォローアップ時の有意味度の得点を示しものが Fig.1 である。

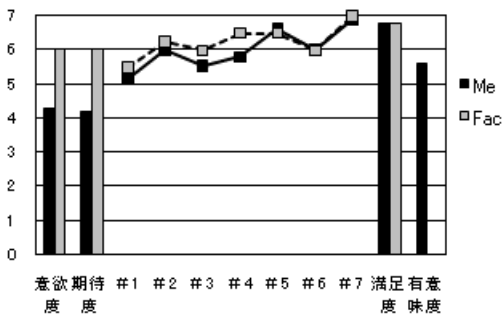


Fig.1 ファシリテーターとメンバーの得点の推移

#### IV 考 察

##### 1. 本グループの特徴：高展開のグループ・プロセス

参加前の意欲や期待度はそれほど高くなく、参加前の気持ちは不安が大部分をしめていたと思われる Me であったが、異質な存在であった Fac や Co にあだ名をつけるという行為を通し、Gr 開始前から接近を図っていたようであった。そこで、Fac は、Se1 において、Fac と Co の席が横に並んで用意されていたところを、Co の正面、Me の間に入れてもらうことによって、Fac からの接近も試みた。その後の Se は、皆自由に思い思いの場所を選び、過ごすことができた。このような雰囲気の中、Se1 で比較的不安の軽減がなされ、その後の展開へとつながっていったように感じる。また、Gr プロセスは、毎 Se 得点が増加していったわけではなく、Fig.1 で示したように得点の増減を繰り返しながら展開をした。この得点の推移は、Gr のなかで Me が様々な思いを抱きながら過ごした様子の表れであると同時に、テーマの影響もあったように思われる。得点が落ち込んだ Se3 と Se6 の後は、すぐにまた得点は増加しているが、そのテーマは、それぞれ「野外 Se」と「言葉の花束」であった。「野外 Se」は、他の Se とは様相を異にしたものであり、それが全 Se の中盤に組み込まれていることは、息抜きのできる Se として重要な意味を持つ。篠原ら (2007) は、「野外

Se」に関して、20 代前後の若者がずっと同じ部屋でじっと話して過ごすことの難しさについて触れ、自由に行き場所を決めることのできるこの Se は「枠破りの衝動を発散させる意味を持つ」と述べている。「言葉の花束」は、3 日間を共に過ごした Me 全員よりあたたかい言葉をもらうことができる Se で、普段なかなか素直に述べられないような思いを、紙に書くという作業を通し伝えることができる体験となっている。お互いを肯定的に認め合う体験が、得点の高さにつながり、その体験は、紙を持って帰るということ、ある意味「お土産」を手にしたことで、さらに各 Me の中で意味あるものとなっているように思われる。さらに、図 1 の得点の推移を、時間軸で見ると、得点が低くなっている Se1, Se3, Se4 は、それぞれその日の最初の Se であり、その後、1 日目、2 日目、3 日目ともその日の中では得点が下がることはなかった。そのため、Se3 や Se4 の得点の落ち込みは、魅力度の低さというよりは、前夜に Se が深まり得点が高くなった後の翌日に再び新たなスタートをきったことが影響されたように感じた。これは、Gr の中で時を過ごすほど、各 Me の展開は進んでいるということ、つまり Gr の持つ力や効果の証明とも言えよう。

村山・野島 (1977) は EG プロセスの発展段階を、「段階：当惑・模索」、「段階：同一性の模索」、「段階：否定的感情の表明」、「段階：相互信頼の発展」、「段階：親密度の確立」、「段階：深い相互関係と自己直面」と終結段階にまとめ、段階まで達した後は、段階をさらに深くしたと段階をさらに深くしたの繰り返しが起こるとしている。野島 (2000) はさらに、この EG プロセスの発展段階を、段階～にあたる「導入段階」、段階以降にあたる「展開段階」、「終結段階」の大きく 3 つの発展段階にまとめている。グループ・プロセスの展開はこのグループ・プロセスの発展段階によってみることができ、最後まで導入段階をうまく経過できなかった Gr は「Low Development Group」、導入段階を経過するも展開段階の進展がやや不十分な Gr は「Middle Development Group」、導入段階をうまく経過し、かつ展開段階もかなり進展した Gr は「High Development Group」である (野島, 2000)。今回の Gr は、この段階の記述にあるような、相互信頼や親密度の確立、自己直面が行なわれた Gr であると言え、かなり展開をした Gr であると捉えることができる。今回の Gr は、研修型の特徴である動機付けの低さは見られたものの、その後の Se の魅力度の得点は高く、このことから Gr プロセスは高展開したと言えよう。「自発性」や「Gr の発展」という点について非構成ほどの深まりは難しいとされる半構成方式の特徴は、本 Gr ではそれほど目立たなかった。さらに、フォローアップ・アンケートからは、日常生活への影響が記述されていた

が、Meはそれを良い影響をして捉えていることがうかがえる。プロセスが高展開したことと、その満足感が現在もMeの心の中に生きていること、良い影響を感じていることは、深く関係していると考えられる。

## 2. グループの展開の促進要因

高展開することに難しさがあるとされる研修型EG、半構成方式のEGであったにもかかわらず、高展開をしたことについてその要因を考察することで、これらのEGの有用性をさらに高めることができるであろう。半構成方式の実践において、高展開をしたGrの報告は今までに見られなかったものであり、以下にその要因と考えられる点を述べる。

### (1) ファシリテーターとメンバーの違いに焦点をあてなかったこと

今回のGrのようにMeが既知集団であるということは、Facは異質な存在として認知されやすい環境であったと考えられる。本Grは、Meの留年や浪人という経歴所有者もおらず、全員が女性、同学年の集団であった。それ故、Meの同質性はより高く感じられた。安部(1996)は、グループ体験の中で、どのようにFacがMeに関わろうとし、Me間の現象に働きかけようとしているかを理解するひとつの切り口として、<同じ>と<違い>という言葉を鍵概念として挙げている。Facは唯一日常を共有しない人であり、その違いとは、Facへの依存や期待でもあり、時には対立や反発を生み出すものでもあるとされる。FacとMeの違いについて、違いを明確化したり同じにしたりするという方向性を持たず、ただ事実としてその違いを意識しながらのファシリテーションを行なうことで、過度な期待や対立等が起きなかったと考えられる。それは、<同じ>と<違い>を操作変更するのではなく、そのどちらともをそのままに、存在するままに置いておくことを行ない、その変化に対してはそれをそのままに受け止めたとも言える。例えば、Se開始前にMeはお互いをあだ名でFacに紹介しているが、Facにもあだ名を付け、Meとの<違い>は<同じ>に変化した。一方で、CoはMeにとって自分たちとは違う異性であることは確かであり、例えばSe3ではCoは異性として、男性としての語りを求められていたようであった。MeがFacを<違い>と捉えている前提はありながらも、その中でも、<同じ>と<違い>とが存在し、Facの意図的操作ではなく、Meが、Gr全体の流れが、それを決めていたように思われる。

### (2) ファシリテーターの違いの相互尊重

展開段階の前に、導入期として不安を述べる機会をSe1で設け、Meがその当惑を言語化できる機会を得たことは、その後Grが大きく展開したことと関係していると考えられる。Se1でFacとCoはMeの不安、質問

に対し、異なる意見を述べている。内田ら(2003)は、既知集団のGrに関して、FacとCoの「ちがいを材料として取り扱い、モデルとなることで、Gr内に「ちがいを許容する雰囲気を作り、それがグループ・プロセスの理解とファシリテーションに生かされることを示唆している。FacとCoの違いについて、Meが混乱することなく、それを受け入れることができたのは、まずFacとCoがお互いの違いを認識し、許容したためだと考えられる。また、内田ら(2003)は、Coが自由に発言できる関係性がFacとの間に築かれていることが重要であると述べている。FacとCo間で信頼感を持っていたことは、安心して違う意見を言うだけではなく、Meへのモデリングの効果もあったと思われる。Me同士がお互いの違いをも受け入れられる要因となったとも言えよう。

また、これらがSe1という導入段階で行なわれたことにも大きな意味がある。既知集団のファシリテーションのアプローチの工夫として、野島(2000)は、グループ・プロセスの早い段階から積極的にMeに関わっていくアプローチを提示している。この工夫は、Me行動の統制を目的とせず、あくまでもファシリテーター自身の自己一致(Congruence)に基づいての行動であるとされる。本Grでも、FacとCoは、Meの不安に対する率直な思いをそれぞれ語っており、どちらの方向で行くかを決定することを重要とせず、お互いの考え方を受け入れている。

また、各SeごとにFacとCoで感想や気になっていることを共有したが、まずSeアンケートで紙面への感情の記入を素直に行ない、それをお互いに読み合った後にシェアリングをした。まず1人で自分の感情や感覚の整理や確認を行なう時間があったため、2人でのシェアリングは、どちらかの感想や意見に流れることがなく、FacもCoも自分の感想を大切にでき、お互いの感覚を主張しあえたように感じた。

### (3) ファシリテーターの介入の相補性

内田ら(2003)は、一方が介入するときには、他方がサポートにまわるといった、両者の「ちがいを活かしつつ、相補的な働きかけを行なうことで、複眼的、多面的理解が可能になると述べる。Se3でBが涙を見せた際、FacはBに寄り添い、CoはB以外のMeとBへの心配や思いを共有するとともに、動揺を大きくしないよう働きかけた。2人のファシリテーターがいることの意味について、安部(1982)は、例えばあるMeにひとりのファシリテーターが深く関わっているときには、どうしても、他のMeが、いわゆる見えなくなってしまう現象があり、そのような時にもう1人信頼できるファシリテーターがいると、見えなくなっているMeをフォローしてもらっているということで、より深くそのひとりのMeに関わ



ることができる。Se3でも、FacはCoの存在に支えられ、Bとの時間を過ごすことができたと言える。

### 3. グループの展開における留意点

Grの展開における留意点としては次のようなことがあげられよう。

#### (1) 高揚感への警戒

Grの雰囲気はSe全体を通し、常に暖かで柔らかなものであった一方で、高展開したGrであるが故のエネルギーの高さも感じられた。それは、Seの経過のみならず、Seアンケートからも読み取ることができる。FacやCoに対し、「頑張っているすごい」、「尊敬する」といった感想が多く見られ、同時に自分達も「頑張りたい」、「頑張らなきゃ」という記述が目立った。Gr全体の雰囲気が、エネルギーに満ちている状態であったと言える。Meが皆この雰囲気に対して無理せずについていけるかの確認は丁寧に行なう必要があるだろう。Grの雰囲気に巻き込まれ、高揚感と共に意図せずとも「頑張る」Meが存在する可能性が考えられる。

Seの魅力度がとても高かったSe5では、Meはそれぞれが相互信頼や親密度を獲得したり自己直面を行なったりしていたと考えられる。この時FacもMe1人ひとりの話に深く感銘を受け、Meと共に大きな感動を味わった。ただ、Facはその高揚感のままに動くことにはどこか違和感もあり、発言したい気持ちとうまく言葉にできない気持ちとで揺れ動いた。Facはその気持ちをそのままMeに開示したが、そのことは、中田(1999)が、行き詰まり感を行き詰まり感として受け入れ、必要に応じてそれをMeにありのままに開示し、行き詰まりを何とかしたい気持ちが湧いていることを表明することが、行き詰まりを何とかしようとしているMeと同じ次元で模索する共同作業者であることを伝えることになり、その時、FacとMeという立場上の差異が縮まると述べるように、高揚感のある程度客観的にみる視点が、FacとMeの距離を縮め、同時にオーバーヒート状態の防止となり、しっかりと地に足のついた展開へとつながったと考える。

#### (2) セッション外への目配り

Gr内での凝集性が高まったことと関連し、まとまりの強さを表すエピソードがSe内に限らずSe外でも見られることがある。Se外の時間は、ファシリテーターが関与していないという点でSe内の時間とは大きく異なり、そのまとまりは、ファシリテーターらをおいて進行するものであると言える。それが顕著になってくると、ファシリテーターとMeの間に隔たりが生じる可能性がある。本Grでは、Se2開始前にMe全員で「なんでもバスケット」を行っていたという場面があったが、Facはそれを1回許容し、Seに入っている。Beck(1974)は、Grの成功要因のひとつに柔らかさ(flexible

roles)を挙げており、それを受けて安部(2002)は、既知集団のファシリテーターにはMeの様々な試みを、ファシリテーターとMe全体をつなぐ共通項として受けとめる柔らかさが求められると述べている。ファシリテーターはSe外の出来事にも柔軟に対応し、オーバーヒートへの防止策を取る必要がある。

## V おわりに

本稿では、半構成方式による研修型EGの事例について、Facの視点により報告を行なった。高展開をした要因や、高展開をした故の留意点を検討する中で、ファシリテーションに注目したことにより、深まりにくいとされていた半構成方式の研修型EGについて、新たな有用性を示すことができたと考えられる。しかし、「Co・ファシリテーター方式」では、FacやCoのそれぞれの在り方の両方が、Grに大きな影響を及ぼす。そこで、今までそれぞれで行われてきたFac、Coのどちらか一方の報告のみならず、その関係性について着目し、より複眼的にファシリテーションについて検討することも必要であると思われる、今後の課題とする。

## 謝 辞

本グループのCo・ファシリテーターを担当いただきました九州大学大学院人間環境学府の佐々木健太さんに感謝致します。また本稿をご校閲いただき、貴重なご意見をくださいました九州大学大学院人間環境学研究院の野島一彦教授、同針塚進教授に感謝致します。最後に、本稿をまとめるにあたり、承諾をいただきましたメンバーの皆様へ心より御礼申し上げます。

## 引用文献

- 安部恒久(1996). エンカウンター・グループにおけるファシリテーターに関する研究( ) <同じ>と<違い>を鍵概念として 中村学園研究紀要, 28, 11-18.
- 安部恒久(2002). 既知集団を対象としたエンカウンター・グループのファシリテーション 心理臨床学研究, 20(4), 313-323.
- Catharina H.Y.Lee. (2008). 「半構成方式」による看護学生の既知のエンカウンター・グループの事例研究 九州大学心理臨床研究, 27, 61-69.
- 原田絵美子(2007). 看護学生への半構成式エンカウンター・グループにおけるCo・ファシリテーター体験の一考察 九州大学心理臨床研究, 26, 133-141.
- 桂木 彩(2007). 看護学生を対象とした「セッション・テーマ設定エンカウンター・グループ」におけるCo・

- ファシリテーター体験の考察 九州大学心理臨床研究, 26, 153-160.
- 桂木 彩 (2008). 看護専門学校生を対象とした「半構成エンカウンター・グループ」のプロセスとファシリテーター体験に対する考察 九州大学心理臨床研究, 27, 33-40.
- 森園絵里奈・野島一彦 (2006). 「半構成方式」による研修型エンカウンター・グループの試み 心理臨床学研究, 24(3), 257-268.
- 中田行重 (1999). 研修型エンカウンター・グループにおけるファシリテーション 逸楽行動への対応を中心として 人間性心理学研究, 17(1), 30-44.
- 二ノ宮英義 (2007). 「半構成方式」による看護学生の研修型エンカウンター・グループの事例研究 九州大学心理臨床研究, 26, 87-94.
- 村山正治・野島一彦 (1977). エンカウンターグループ・プロセスの発展段階 九州大学教育学部紀要, 21(3), 257-268.
- 星野 希・野島一彦 (2008). 「半構成方式」によるエンカウンター・グループのファシリテーター養成に関する考察 ファシリテーター・キャンディデートの視点から 九州大学心理学研究, 9, 153-161.
- 野島一彦 (1994). 看護学生の研修エンカウンター・グループ Low Development Group の事例研究 福岡大学人文論叢, 25(4), 1577-1609.
- 野島一彦 (2000). エンカウンター・グループのファシリテーション ナカニシヤ出版
- 篠原光代・野島一彦 (2007). 看護学生のための「半構成方式」研修型エンカウンター・グループのファシリテーションに関する一考察 九州大学心理学研究, 8, 155-163.
- 内田和夫・野島一彦 (2003). ベーシック・エンカウンター・グループのファシリテーター養成における「コ・ファシリテーター方式」の意義 「ちがいに」に着目して 九州大学心理学研究, 4, 75-81.